

## 「ならなぎ」活動報告

報告者： 玉尾 洋一

日時	2025年10月12日(日) 13時～15時30分	天候	雨のち曇り	歴史文化チーム定期活動 於：音声館
案内団体または催事名	仏像鑑賞入門第3回目		人数	大人： 18名

(敬称略)

出席者：遠山、中谷、堀野、吉川、義田、木邨、玉尾洋、近野、中澤、廣瀬、山口、池田、奥山、  
北川、玉尾ひ、寺尾、山岡、米村

実施内容：13時～15時30分 座学

### ●深掘り発表 13時～13時半 中谷さん

#### ・興福寺僧のやったこと

##### 1. 758年鑑真追放

聖武天皇の勅請を受けて、布教のため来日するが、僧侶らの反発を受ける。

戒律を授ける方法 鑑真は従他受法：従他受法（具足戒）：三師七証について受戒することをいい、三師とは戒和尚（かいわじょう）・羯磨師（かっまし）・教授師、七証とは七人の証明師のこと、合計10人の人数をそろえて、授戒する。これら10人の師匠は、二百五十戒を厳重に保っている者でなければならない。

従来の日本では自誓受法をしていた（大乗戒）：辺国で適当な戒師がない場合、自ら仏像前において誓いを立てて受戒する方法をいう。

従って古来からの僧侶は一から従他受法をせねならず、今迄の修行が無になることから鑑真の追放を図る。

##### 2. 強訴

興福寺は各地区に多くの荘園を持っており、それを守るための大きな武力も備えて、中世大和の支配者として君臨した。興福寺の権益に都合の悪い政策が発布されると、春日大社のサカキに神鏡をつけて神木とし、朝廷・幕府に強訴した。これが聞き入れられない時は、多人数の僧侶が神木を持って徐々に京都に向かい、圧力をかけ屈服させた。968年から1501年まで90回に及んだ。

### ●仏像鑑賞入門第3回目 13時半～15時半 中澤講師

#### ・白鳳時代の仏像 (P. 75) からスタートするが、白鳳時代の代表的な仏像「香薬師像」が記載されてないので別途資料にて説明

光明皇后の念持仏で、新薬師寺に祀ってあった。しかし3回も盜難に遭い、現在、行方不明で所在がわからぬ。しかし奇跡的に右手だけ新薬師寺に戻った。

本物の香薬師像から石膏型が型取りされていて、佐々木氏が自費で模造鑄造した（3体）。そのレプリカが奈良国立博物館、新薬師寺、東慶寺（佐々木氏の菩提寺）にある。（詳細ビデオがならなぎ文庫にあります）<https://naranagi.jp/kaihatsu/kouyakushi.pdf>（盜難前の香薬師像）

#### ・旧東金堂本尊仏頭 <https://naranagi.jp/butsuzou/index14.html>

南都焼き討ちにより本堂が焼け落ち、急いで再建するも、ご本尊が間に合わず、1187年山田寺のご本尊薬師如来像（685年開眼供養）をもらい受けた。その後1411年の火災で首だけが残り、再再建された東金堂のご本尊の台座の中に奉安された。

特徴：ふっくらとした頬、キュッと閉じず柔らかくした唇は「童子」を連想さす。目元もパッチリした杏仁形の飛鳥仏と異なり、蒙古襞（もうこひだ）を思わせる表現

基準作例：製作年代がはっきりしている事、損傷部分から内部の構造が分かる事

仏頭には製造過程で型持に加えて銅製の釘が使用、飛鳥時代には使われていない。また天平時代には型持と釘が一体化したものが使われる。これにより年代判定に役立つ。

#### ・法隆寺夢違観音立像 <https://naranagi.jp/butsuzou/index15.html>

右手に水瓶をもっているので観音像だと判る。また頭部には「三面頭飾」を付けて、正面に阿弥陀仏が

彫られている事からも観音像である。「三面頭飾」は比較的に古いものに限られ、天平時代の後半にはなくなる。このことから白鳳時代の作と思われる。

特徴：天平時代には写実的になるが、これはそうではない。平たく細長い飛鳥仏のプロポーションに比べるとブロックを積み重ねたようにずんぐりとした姿が、子供の体形に見える。おなかの部分もふくらみ、これがまた「童子」を連想させる。

名前：「ゆめたがいかんのん」「ゆめちがいかんのん」どちらとも言う。江戸時代に付けられた。

出開帳：江戸時代に遠方にある有名な仏像を運んで、そこで展覧会をしていた。元禄時代盛んに行われていた。現代の仏像特別展のルーツ。

・法隆寺 伝橘夫人念持仏阿弥陀三尊像 <https://naranagi.jp/butsuzou/index16.html>

サイズは中尊が33cm、脇侍が27cmと小さいが、厨子は269cmもある。橘夫人（藤原不比等の夫人）

特徴：中尊の阿弥陀如来像は人中（鼻と口の間の溝）が深く、唇の両端は若干吊り上がっている。頬は柔らかそうに肉づいている。顔全体は平らで角ばった印象。首には「三道」があるのが多いが、これにはない。また耳朶に穴がないことの二つは飛鳥から白鳳にかけての特徴

中尊だけでは種類を判別するのは難しい。右の脇侍には化仏があるから観音像。左は頭上の宝冠に水瓶が埋め込まれていて、勢至菩薩だ。観音、勢至菩薩を脇に従えている事から阿弥陀如来像だと確認できる。

・深大寺 釈迦如来倚像 <https://naranagi.jp/butsuzou/index18.html>

大正時代に国宝に指定されたが、昭和25年「文化財保護法」が施行されその時、皆「重要文化財」となり、一から「国宝」を認定して行った。それから67年後に再び「国宝」指定された。

両足を地面につけて座る姿で、「倚像」と呼ぶ。

特徴：顔のつくりとイメージが若々しく、笑みをたたえた少年のよう。目元には上瞼が目頭を覆っている蒙古襞が見られる。体つきはお腹がふくらとして、その上に薄い衣をまとっている。天平時代になるとさらに薄くなり、おへそが見えるような感じになるが、この像はそこへ向かう時期のやや薄い衣だ。

この像は本来脇侍であり、須弥壇の下にしまわっていた。明治になって発見された。右手の指2本が欠けているが、極めて良好に保存されていた。深大寺は天平時代の建立なので、白鳳時代の仏像が安置されていたのは謎である。

●次回開発勉強会「仏像鑑賞入門」4回目。P. 94～

日時：11月9日（日）13時～

場所：音声館

以上

(気になった点、引継ぎ事項)